

● 「トマトワールド」視察 ～オランダ王国の農業政策について～

団員 川本 健太

はじめに

日本の国土面積は3,780万haで、そのうちの12%が農用地で455万haである。

オランダ王国（以下オランダ）の国土面積は九州とほぼ同じ大きさで415万ha。そのうち44%に当たる184万haが農用地である。

オランダの農地面積は日本の半分以下であるが、アメリカに次ぐ世界第2位の農業輸出を実現している国である。そんなオランダの主要農産物の一つであるトマトの生産技術、安全性や健康面などを紹介する「トマトワールド」の視察概要について報告する。

視察内容



(生産されたトマトについての説明)

今回訪れた「トマトワールド」は、首都のアムステルダムから車で約1時間半、距離にして約70km南西に下ったホンセラーズデイクという土地にある。

そもそもこのトマトワールドは6つの農家が集まり設立した会社で、現在は約50社の企業からの出資により運営されている。

オランダは1995年に公表した第3次エネルギー政策白書で、電力市場の自由化を目指すとし、2004年7月、電気法等の改正を行って電力市場の全面自由化を行った。

この電力民営化に伴い、国民が自ら電力会社を選択しなければならなくなったという背景もあり、電力はもとより多方面でスケールメリットを生かすべく様々な見直しが行われ、その過程で「トマトワールド」が生まれた。

トマトワールドを訪れる道中、周囲に広がる温室の規模の大きさに圧倒された。

国土の4分の1が海面より低い干拓地で、平坦な土地には温室が広範囲にわたり建てられていた。現在、オランダ全体では1万haの温室があり、内1,560haでトマトが栽培されている。また、面積もさることながら、その高さは日本の平均的なハウスの2倍はある。およそ6m以上の高さがあるそうで、温室の高さはトマトの成長に合わせて高く変更、施設の改良が行われている。加えて、温室の素材はビニールではなく、ガラスである。

トマトワールドでは、トマトの栽培方法、現在栽培されているトマトの品種の紹介などを受け、実際に多くの種類のトマトを試食した。形や色、サイズも様々で、約80種のトマトを栽培している。

この施設では先ほど述べたとおりトマトの生産技術、安全性や健康面などを広く紹介するだけでなく、学生たちが訪れ、ロジックやテクノロジー、マーケティングなどを学ぶ。



(温室内にて)

また、情報を共有し、知識の交流と理解の促進を促すほか、行政に対して「地熱の活用」「輸送道路の新設」などの要望を行っている。

施設の担当者マヤさんの話の中で印象的だったのが「種」の話で、オランダでは分業化が進んでおり、品種改良を行い種をつくる「種屋」なるものがある。どれくらいの規模の温室で、どれくらいの収穫を計画し、どのようなサイズの、どのような味の・・・といった具合に、その内容は実に詳細で、生産者の希望に沿った種をつくってくれるという。

しかし、その種の金額に驚いた。1kgの種が7万ユーロ、視察時のレート1ユーロ=127円計算で、約890万円もするのである。1kgの金塊が約450万円なので、トマトの種が「金(GOLD)」よりも高いのである。

ちなみに、1kgの種で8ヘクタール分のトマトが栽培できるそうである。そして、この種の開発には約5年の期間を要するそうである。

まとめ

今回のトマトワールドでの視察を終え、日本とオランダの農業の違いを大いに感じた。

規模の大きさもさることながら、ロックウールで水耕栽培し、水、栄養分、二酸化炭素の分量など、すべてがコンピュータシステムで管理されている栽培方法は、農業というよりも製造業に近いような印象を受けた。日本とは土地の条件はもとより、気候風土も違う。全てをそのまま持ち帰れるようなシステムではない。しかし、農業従事者の高齢化が進み、担い手不足が深刻化する中で、食糧自給率を維持・発展させていく点でも、TPPを踏まえ国際競争力を増していこうとする点においても、見習うべき事は多くある。

スペインでは1kgのトマトを栽培するのに30リットルの水を使用するが、オランダでは7分の1以下の4リットルの水で栽培する。このとき使用する水は雨水である。さらには発電時に発生した蒸気排熱や二酸化炭素まで再利用している。資源を有効活用し無駄を省く取り組みは、積極的に進めるべきである。日本でもIT企業などが農業法人を設立し、「スマートアグリ」の試みが始まっている。企業であれ個人であれ、多くの業界で一般的に使われているIT技術を農業にも生かすことができれば、限られた土地、限られた人員でも、これまで以上に質・量の両面での発展が期待できるのではないかと感じたところである。



(トマトワールド前にて)